

敦賀の水島 その地形と博物

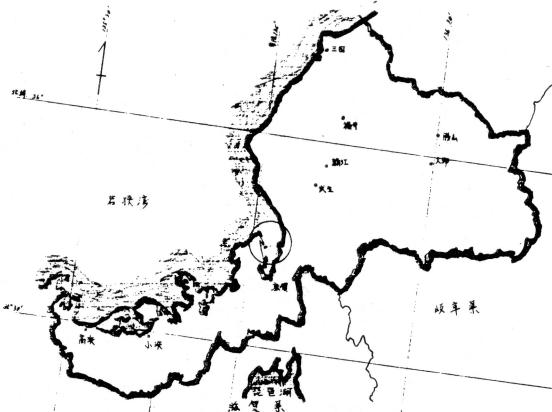
敦賀市職員郷土誌同好会 *

・概 情

水島は、リアス式の若狭湾の一隅、敦賀半島の先端、明神崎の東方に位置し、三島からなる美しい島である。北上する暖流と、南下する寒流の合流点のためか島にはめずらしい生物や、漂流物があると言われ、いろいろの方々が、それぞれの立場から調査してきた。近年の大型レジャーのあ

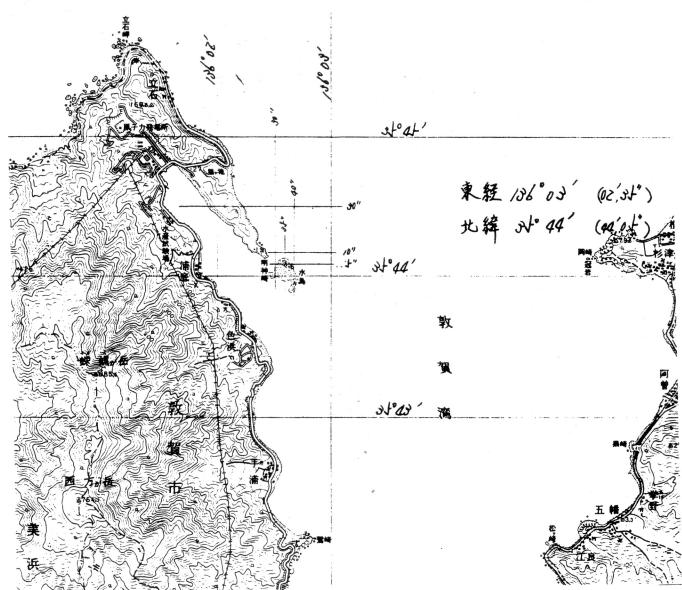
おりか、きれいな水島も夏には俗化しようとしている現在、地元の我々として、少なくとも現在の水島を何らかの形で残しておきたいと言う会員1人1人の思いがここに調査のまとめとして作成するだいです。なにぶんにも我々は趣味の域をでない者の集りであり、独断的な、あるいは偏見的な間違いがあるやも知れませんが、その点、諸先生方のご注意やお叱り、ご意見などいただければ我々の今後の活動の力になることと思います。

福井県全図



・水島の今昔

水島は、慶長11年の頃(1606年)越前絵図に記入されている。又「敦賀誌」には「此浦(浦底浦)え前海上八丁(873M)許にして、廻り一丁(109M)余の小島有、白沙を穿ては水湧し故に土俗水島と云松樹一本たてり、只種々の水鳥の栖処とせり」又、明治14年(1881年)の浦底浦地誌取調帳(浦底区有文書)は、「水島、二島に分る、南にあるもの上水島と言う、東西拾七間(31M)、南北壱町7間(122



* 代表：江戸 富士夫(敦賀市役所)

M) 周廻式町五十間（309M），北にあるもの下水島と云う。東西式拾五間（45M），南北壱町五間（118M），周廻式町五十間（309M），二島の離るる其間最も近き處式町五拾五間（318M），本浦より東方海面直径凡拾町（1091M）を隔つ，樹木生ぜず，稲梁応ぜず，僅かに荆棘を生ずる而已」と紹介する。（文出 日本書紀大系18）

現在，水島は，三つに分れている。より北にある島を本島，それより南の方へ中ノ島，鼻（端）ノ島と呼ばれている。本島の長辺112M，短辺64M，中ノ島長辺110M，短辺48M，鼻ノ島長辺61M，短辺39Mとなっている。航空写真より見た感じでは，かって明神崎から地続きであったのかも知れない。

尚，水島が三島になったのはいつなのかはっきりしないが，地元の年寄の中には，水島は二島であることを信じて疑わない人がいることを思えば，ごく最近のことのようである。

担当 江戸富士夫，佐竹 克己

高橋 雅弘 鈴木 修二

岸本 幸子，尾崎 琴代

古江 孝治



尚，写真は日本ピーエス・コンクリート株の御厚意によるもので，厚くお礼申し上げます。
三島のうち，上方が本島である。

おわりに，我々にこの稿を書く機会を与えて載きました博物館に厚くお礼を申し上げます。

植物について

担当 山本 正治・福岡 修

水島三島の樹木及び植物調査については、先に敦賀市文化財審議会、天然記念物調査委員、香室昭円、竹中淳三両氏によって現地調査報告書が作成されているが、今回、我々のメンバーによって、昭和57年6月、昭和58年6月、昭和59年6月、昭和59年8月の計4回にわたり舟で渡島し現地調査を磯部より内陸部について調べ、現地で植物名不明のものは採集をし、自宅に持ち帰り標本にし、植物名を調べ上げた次第です。更に不明の物は福井市立自然科学博物館の先生並びに鯖高の斎藤先生、西小の寺下先生に大変お世話になったことを加えて厚くお礼申し上げます。

1. 次のような海浜特有の群落を見る事が出来た

- Ⓐ ハマニンニク群落
- Ⓑ コウホウムギ群落
- Ⓒ スナビキソウ群落
- Ⓓ ハマナシ群落
- Ⓔ ハマボウフウ群落
- Ⓕ ハマゴウ群落
- Ⓖ コバノタツナミ群落

2. 樹木類では次のような種類が生えていた

黒松：大小69本 エノキの群生 ヤマグワ：大3本・小約40本程 モモノキ：4本
ネムノキ：12本 アカメガシワ：10本

3. 変った植物としてはキジカクシ、ジャノヒゲが毎年殖えているようだ。もう一つは昭和58年6月の調査では生えてなかったものが、昭和59年8月の調べでは、中ノ島の磯辺の砂地で蔓を延して、径15cm程度の中玉が2個も実ったカボチャを見ることが出来た。

4. 海浜植物で県内でもあまり見られない、学術的にも貴重である食用植物のハマボウフウが本島と中ノ島で見る事が出来た。特に本島では群生しているが、夏場は海水浴客に踏みつけられて、あまり姿を見る事が出来ない誠におしいもので、夏場の保護策が必要と思われます。

5. 海浜特有の植物 スナビキソウ・ナミキソウ・ハマニンニク・ハマゴボウ・コウホウムギ・マツナ・ツルナ・ハマナシ・ハマボウフウ・ハマゴウ・コウボウシバ・ハマヒルガオ・ハマウド・ハマダイコン・マンテマ・ハマエンドウ等数多くの種類が生えており、本当に水島三島は学術上貴重な処であるため、夏場の人為的な要因によって減少する恐れが多分にあるため、自然保護上何らかの保護指導が望れます。

6. 毎年の調査において、本島・中ノ島・鼻の島ではカルガモが巣ごもり中で、卵を7個～4個をだいており人が近づいても逃げずにいる。急に足もとから、とび出るので人の方が驚く始末です。今年の8月の調査にも抱卵しているカルガモの巣が二ヶ所とも中ノ島で見られた。

7. 夏の海水浴客にはペットの犬を連れて上陸する人も居るが、他所の雑草の種子が付いて来る恐れ、更に上記のカモに抱卵させない様にする恐れ等があり、渡船させる場合は充分注意したいものだ。

水島三島の植物分布

科名	和名	本島	中ノ島	鼻ノ島	科名	和名	本島	中ノ島	鼻ノ島
あぶらな科	ハマダイコン	○		○	たで科	ママコノシリヌグイ			○
あかざ科	オカヒジキ		○		つゆくさ科	ツユクサ	○		
	ハマアカザ?		○	○	とうだいぐさ科	アカメガシワ	○		
あかばな科	アレチ マツヨイグサ?		○			トウダイグサ	○		
いね科	ハマニンニク	○	○		とべら科	トベラ	○		○
	ヨシ	○			なでしこ科	マンテマ	○		
	チガヤ	○	○		にれ科	エノキ	○		○
	イヌビエ			○	ばら科	モモ	○		
	ボウムギ	○	○			ハマナシ	○	○	
	ギヨウギシバ		○		ひがんばな科	スイセン		○*	
	カラスムギ	○			ひるがお科	ハマヒルガオ	○		○
うり科	カボチャ		○		ぶどう科	ノブドウ	○	○	
かやつりぐさ科	コウホシバ		○		まつ科	クロマツ	○		立枯
	コウボウムギ		○		まめ科	ハマエンドウ	○	○	
ががいも科	ガガイモ	○				ネムノキ	○		
きく科	オヨモギ	○		○	むらさき科	スナビキソウ	○	○	
	カワラヨモギ	○			ゆり科	キジカクシ	○		○
	ハルノノゲシ	○	○			ジャノヒゲ	○		
くわ科	ヤマグワ	○		○		ハマニンニク		○	
	カナムグラ		○		きく科	ハマニガナ		○	○
くまつづら科	ハマゴウ	○		○		オオアレチノギク		○	
さくらそう科	ハマボツス	○				ががいも科	イケマ		○
しそ科	ナミキソウ		○	○					
せり科	ハマウド	○	○						
	ハマボウフ	○	○						
	ヤブシラミ			○					
あぶらな科	ハマハタザオ		○	○					
あかね科	ヘクソカズラ			○					
あかざ科	ハマアカザ		○	○					
たで科	スイバ	○		○					
	ミヅソバ		○						

(*) 八重咲き

昆虫類について

担当 竹鼻 弘徳

科名	和名	科名	和名
トンボ科	ウスバキトンボ	シロチョウ科	モンキチョウ
ハサミムシ科	ハサミムシ		キチヨウ
キリギリス科	セスジツユムシ	テングチョウ科	テングチョウ
バッタ科	ショウリョウバッタ	タテハチョウ科	ヒオドシチョウ
	オンブバッタ	マダラチョウ科	アサギマダラ
	クルマバッタ	カノコガ科	カノコガ
ナガカメムシ科	ジュウジナガカメムシ	ムシヒキアブ科	アオメアブ
カメムシ科	ブチヒゲカメムシ	ミツバチ科	クマバチ
テントウムシ科	テントウムシ	スズメバチ科	フタモンアシナガバチ
	ナナホシテントウ		オオフタオビドロバチ
ウスバカゲロウ科	ホシウスバカゲロウ	ベッコウバチ科	アカゴシベッコウ
アゲハチョウ科	キアゲハ	ツチバチ科	コモンツチバチ
シロチョウ科	モンシロチョウ		

昆虫に関する調査は、1983年6月5日、1984年6月3日、同年8月12日の計3回実施して、上表の昆虫を採集又は確認した。

この結果、鱗翅類の幼虫の食草、食樹となる植物が相当自生しており、次の鱗翅類については水島での生息が可能と思われる。

キアゲハ、モンシロチョウ、キチョウ、テングチョウ、ヒオドシチョウ、アサギマダラ、カノコガ。

また、フタモンアシナガバチの巣作り、ウスバカゲロウ類のすり鉢状の巣及び幼虫を多数確認した。この調査は3回共夏季に実施したため、季節的な片寄りは否めない。今後、機会をつくって他の季節における調査を実施したいと思っている。

貝類について

担当 福岡 修

水島の貝については、鯖江市の故古川田溝、故窪田彦左エ門先生らの研究が知られているが、当時より大分年月も経過して貝類の生態も変わったことと予想されるので調査を行った。

昭和56年5月、57年6月、58年6月、59年6月の計4回にわたり舟で渡島し浜へ打上げられている貝殻と砂と一緒に持ち帰り、自宅にて選別した。又、磯辺にても生貝を採集した。又、本島の小灌木の中で陸産マイマイ1種を4点採集したが他に生体も見つけたことから漂着した貝殻でない。

i 腹足綱（巻貝類）

科名	和名	科名	和名
みみがい科	クロアワビ	りゆうてん科	ヒメカタベ
すかしがい科	オトメガサ		スガイ
	スカシガイ	えぞたまきび科	タマキビガイ
	スソキレガイ	いそまいまい科	シラギク
	テンガイ		アラウズマキ
つたのは科	ヨメガガサ	くるまがい科	ナワメグルマガイ
	ベッコウザラ	むかでがい科	オオヘビガイ
ゆきのかさ科	アオガイ	たけのこかにもり科	コオロギ (コベルトカニモリ)
	コウダカアオガイ		カニモリガイ
	シボリガイ	すずめがい科	キクスズメ
にしきうず科	ヒメサンショウガイ モドキ	かりばがさ科	アワブネ(クルスガイ)
	アシヤガイ	たまがい科	フロガイダマシ
	クロマキアゲビスガイ		ネコガイ
	チグサガイ	ざくろがい科	ザクロガイ
	イシダタミガイ	たからがい科	メダカラガイ
	クビレクロズケガイ		チャイロキヌタ
	ヘソアキクボガイ	けしかにもりがい科	ケシカニモリガイ
	クボガイ	あつきがい科	イボニシ
	オオコシダカガシガラ	えぞばい科	バ
りゆうてん科	サザエ		コホラダマシ
	ウラウズガイ	たもとがい科	ムキガイ

科名	和名	科名	和名
たもとがい科	ボサツガイ	もつぼ科	シマモツボ
	マツムシガイ	うみひめかのこがい科	ウミヒメカノコ
	フトコロガイ	ゆきすずめ科	ミヤコドリ
	シラゲガイ	おにつのがい科	シマハマツボ
	クダマキマツムシガイ		チビカニモリ
むしろがい科	ヒメムシロガイ	II 掘足網（ツノ貝類）	
	ナミヒメムシロ		
	クロスジムシロガイ		
	ムシロガイ		
まくらがい科	ムシボタル	科名	和名
ふでがい科	ヒゼンツクシガイ	つのがい科	ヒメナガツノガイ
くだまきがい科	ウネダカモミジボラ		
	クリイロマンジガイ	III 二枚貝網	
たけのこがい科	トクサガイ	いがい科	アコヤガイ（幼）
いとかかけがい科	オダマキ		
	ヒメネジガイ		
みつくちきりおれがい科	カズマキキリオレガイ	科名	和名
とうがたがい科	シロイトカケギリガイ	ふねがい科	コベルトフネガイ
	チャイロイトカケギリ	たまきがい科	タマキガイ
	チャイロクチギレガイ	ヒバリガイ	
	ホソクチキレガイ	ムラサキイガイ	
	クチキレガイ	うぐいすがい科	アコヤガイ（幼）
	チヨウジガイ	いたやがい科	ナデシコガイ
まめうらしまがい科	マメウラシマガイ		キンチャクガイ
たまごがい科	ブドウガイ		イタヤガイ
	カイコガイダマシ	うみぎく科	トリボタンガイ
	ハナヅトコメツブガイ	なみまがしわがい科	ナミマガシワガイ
からまつがい科	カラマツガイ	とやまがい科	トマヤガイ
もつぼ科	スジウネリチョウジガイ	つきがい科	ウメノハナガイ
	ヌノメチョウジガイ		チヂミウメノハナガイ
	ツヤモツボ		ウミアサガイ

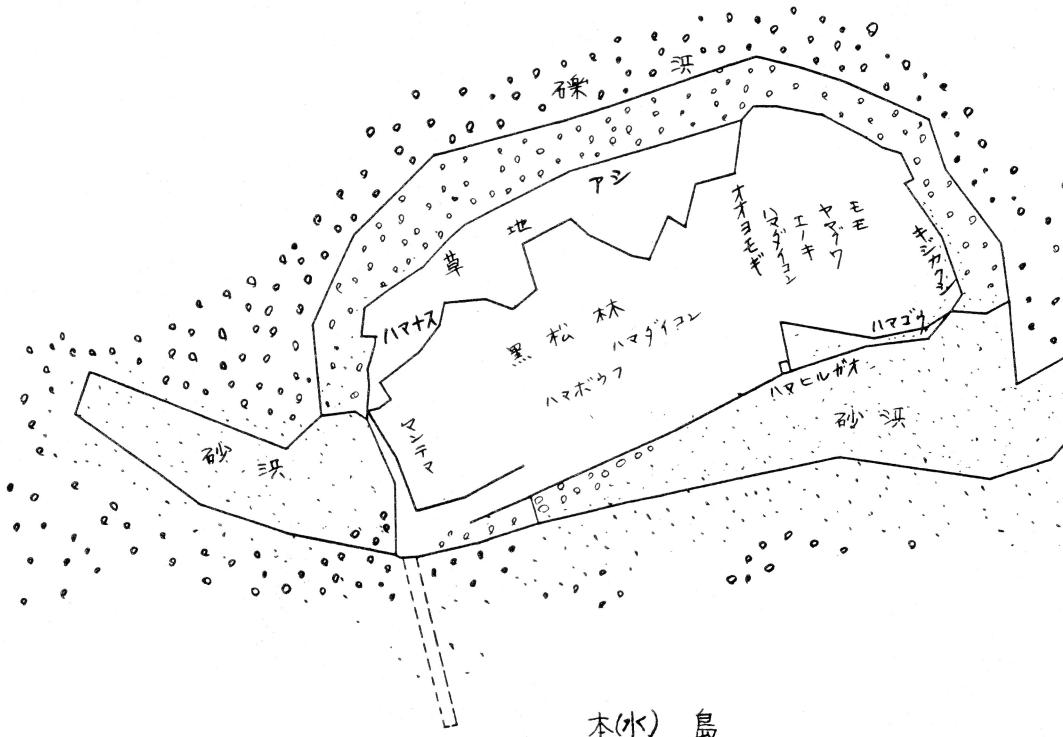
科名	和名	IV 陸産貝類	
		科名	和名
つきがい科	ヒメツキガイ		
きくざるがい科	キクザルガイ		
ざるがい科	ザルガイ	おなじまいまい科	オナジマイマイ
	トリガイ		
まるすだれがい科	ケマンガイ		
	マツヤマワスレガイ		
	カガミガイ		
	オニアサリ		
	チジミカノコアサリ	科名	和名
	ヒメカノコアサリ	おおばふんうに科	バフンウニ
	アサリ・ヒメアサリ	ながうに科	ムラサキウニ
	マツカゼガイ	よつあなかしづん科	ヨツアナカシパン
	ウスシラオガイ	ひらたぶんぶく科	ヒラタブンブク
ばかがい科	バカラガイ	すくてら科	スカシカシパン
ちどりますほがい科	チドリマスホガイ		
にっこうがい科	ヒラザクラガイ		
	シボリザクラガイ		
	ベニガイ		
	トゲウネガイ		
	ヒメシラトリガイ		
まてがい科	マテガイ		
みのがい科	ウスユキミノガイ		

VI おわりに

この稿を書く機会、及び資料等を載きました福井市立自然科学博物館。貝の同定を載きました敦賀高校の松本一夫先生に厚くお礼を申し上げます。

水

島

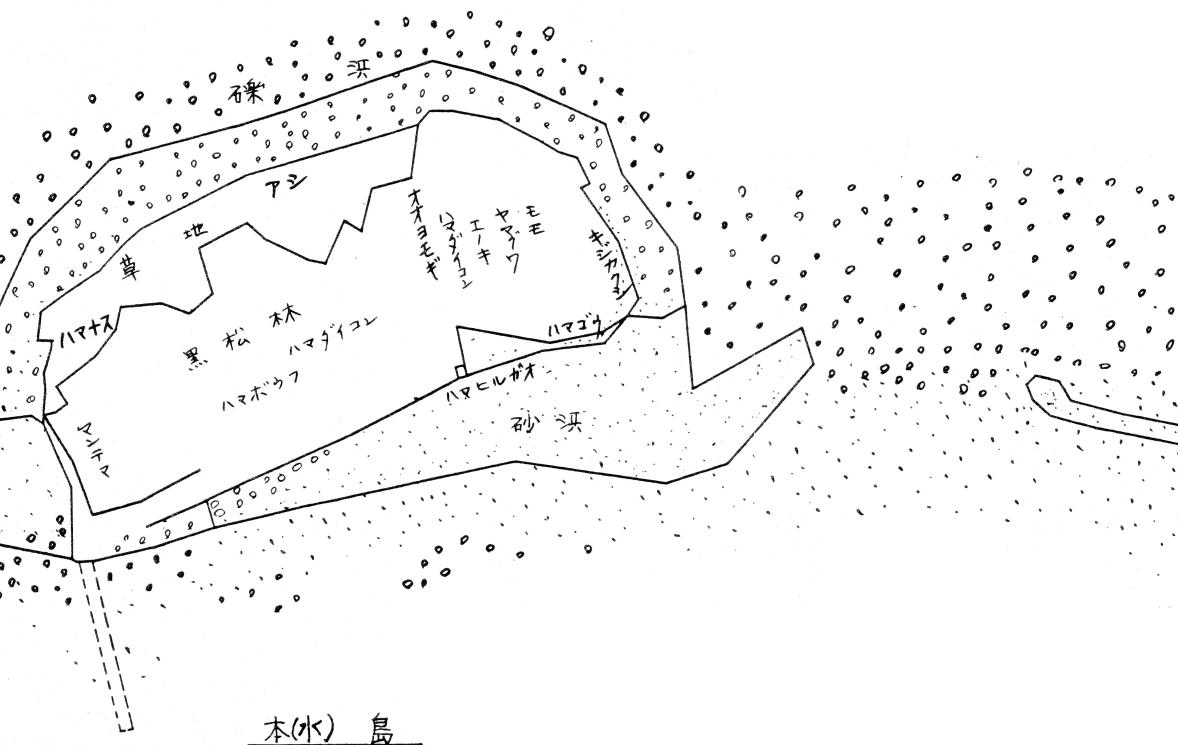


木(水)島

(注) (1) 本島の左手前方が明神崎に続く。

(2) 本図の外側の線は水際を示し、内側の線は略地形を示す。

水 島 平



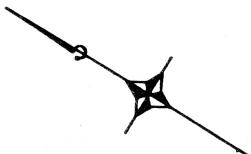
行が明神崎に続く。

線は水際を示し、内側の線は略地形を示す。

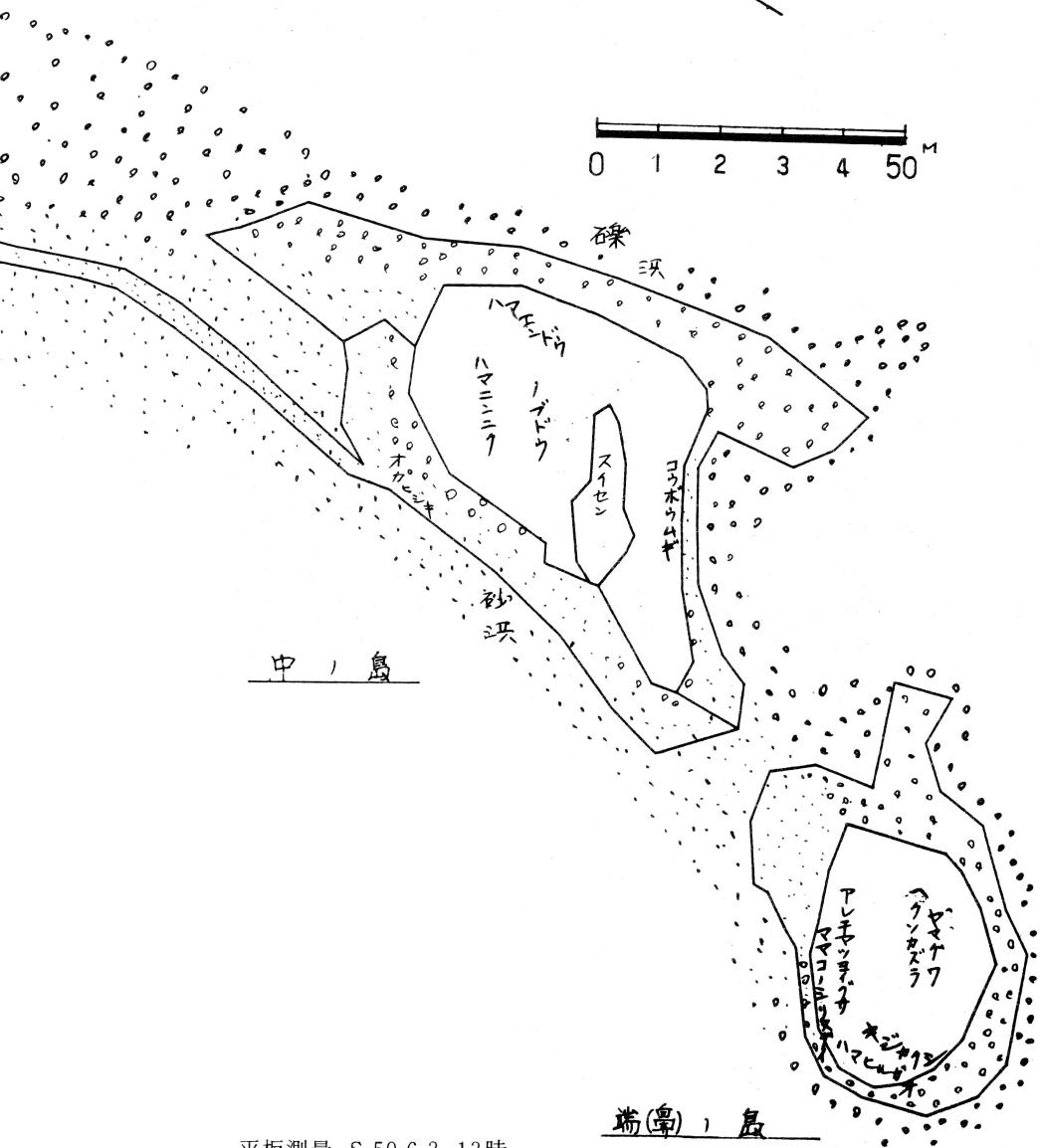
面

义

N



0 1 2 3 4 50m



平板測量 S.59.6.3 13時